『韓国語教育研究』（第２号）別刷　ISSN 2186-2044

【寄稿論文】

日本における韓国語教育と「韓国語教育研究会」の歩み

呉　英元

日本韓国語教育学会

２０１２年９月

日本における韓国語教育と「韓国語教育研究会」の歩み

呉　英元

日韓国交正常化後、日本における韓国語教育と「韓国語教育研究会」の歩みを振り返ってみる。1965 年、日本と韓国の国交正常化に伴い両国の交流は活発になり、企業や留学生の来日活動も活発になった。1968 年、夫、柳尚熙が研究のため来日し、後を追って私も研究を目的に子供たちを連れて 1971 年に来日した。研究を終えたころ、日韓両国の大学で韓国語と日本語の教育に関心が高まり、柳先生は韓国人として初めて上智大学の韓国語担当の専任になり、私は韓国の大学に日本語教育学科の専任として招かれた。日本の大学における韓国語の講座が増え続ける状況によって私も再度来日し、二松学舎大学の韓国語担当の専任教授として招かれた。日本における韓国語教育のブームが起こると、韓国語教育研究会の必要性を痛感し、柳先生と二人で、韓国から講師を招いて「日本における韓国語教育セミナー」を駐日韓国文化院で開催し、「韓国語教育研究会」の母体となった。長年にわたる実践の歴史を経て積み上げてきた韓国語教育と研究会の歩みを時代に沿って振り返ることによって、今、世界中が騒がしている韓国ブームに先立つ教育者として、これからの日本における韓国語教育と韓国語教育研究会の発展につながることを切に願ってやまない。

1.　1970 年代

創設期と言える 1976 年の 4 月、上智大学大学院文学研究科外国語学部に初めて韓国語講座が開設され、柳尚熙教授が、韓国人として初めて文科省の専任講師の認可を受けて赴任した。

1979 年 5 月には、日本における韓国文化普及の拠点として駐日韓国文化院が開設され、9 月から韓国語の講座が開講されることになった。韓国からソウル大学名誉教授・李崇寧博士を招いて開講式を行い、初級・中級・上級のクラスを開き、初代韓国語の講師として私と李辰燮先生、宋敏先生が担当することになった。文化院では、教材を韓国からソウル大学のテキストを取り寄せて使い、最新機器のＬＬ教室、映写施設などと合わせて、受講者に正しい韓国語をマスターさせようとこころ懸けた文化普及の先駆けとなった。受講者は一般社会人が多く、日韓国交による韓国との関連会社に勤める人、韓国に出張が多い人、韓国人の知り合いがいる人、隣国の

韓国を知りたいからなどの理由で登録した受講者たちは、聞くもの見るものすべてが珍しく、授業が終わった後も帰らないでお茶を飲みながら課外談話で質問に熱中していた。文化院の韓国と韓国語に惹かれていく人たちが増え続ける中、文化講座や特別講演、展示会などを開いて日韓親善の交流を活発にやり始めたのもこのころからである。

韓国文化院 友のニュース

第 31 号
1982年2月10日発行
駐日大韓民国大使館
韓国文化院
〒170 東京都豊島区東池袋3-1-1
サンシャイン60, 37F(左翼南)384
TEL (03) 988-9271～4

131号　韓国文化院友のニュース　13

日本における韓国語教育セミナー

李應百教授を囲んでフリー・トーキング

韓国文化院では、韓国語教育研究会会長の李應百ソウル大学教授を迎えて1月30日午前10時から同文化院セミナールームで、「日本における韓国語教育に関するセミナー」を開きました。同セミナーに参加したのは、日本の教育機関で韓国語教育に携わっている諸先生がたで全員参（兵庫大学）柳尚熙（上智大学）先生など30名。

このセミナーでは、日本における韓国語教育の問題点がいろいろ出されましたが、韓国語教育研究会日本支部を中心点として韓国語教育研究の統一性を模索し、相互研究情報を交換することで意見の一致をみました。

主な発言は次のとおりです。

李應百ソウル大学教授（基調講演）

日本における韓国語教育では、いろいろ問題もあると思うが、とくに次の7点を中心に注意するとよいと思う。①習ハはじめに、まず日本にもある子音から入ると比較的簡単である。例えば「チム(針)」などは韓国語特有の音と違って日本人にも発音しやすい。②日常生活に必要なものから入って行くこと。例えば、あいさつなど。③教材の選び方は、「韓国人の生活様式」や「風俗」、考え方などを学ぶことのできるものを使うようにするとよい。④韓国語の単語を覚えさせるというとき、韓国語独特の文字ハングルの上に漢字をふって示すとよい。意味をつかんだことができるから、あとは発音を習得するだけですむ。意味もわからないし発音もむつかしいという二重の難問から解放されるはずである。⑤韓国語独特の発音で、日本人にはむつかしいというような音を教えるときは、日本語の単語を例に引っぱり出してきて、それに似た音を習得させることだ。たとえば「一回のキ」「一章のシ」「きっちりのチ」など、日本人が普段使っている言葉の中から拾い出して習得させることが望ましい。⑥耳から聞いて行くことが最良の道であるが、発音の矯正のためにはイントネーションやアクセントの、正しくてきれいなテープを利用すること。⑦教材はいろいろの例文がたくさん載っている本を使うのがよい。教授法は、適度表をつくり、それをチェックしながら進めて行くことが望ましい。⑧韓国語を矯めて行くためには、機会に行くチャンスをつくること。語学上達の効果をはかるには絶好である。

閔聖洗（韓国文化院語学教師・韓国外国語大学教授）

ハングルで書いた単語の上に漢字をふるという方法は、日本人にとっては意味がわかるという利点があるが、その言葉を完全に習得しているか否かを、チェックしなければならない。そういう方法の教材を使った場合には、必ず最後にハングルだけの教材をつけた方がよい。なお、教師には指導書が必要である。

郭宗石（東京韓国学校教師）

いままでに、私の学校では多数の卒業生をおくり出したが、そのうち完全に韓国語が使えるという人は数名しかいない。やはり、日常、ずっと日本語を使って生活している人が1日のうち微時間かだけ韓国語を使ってみたところで、ムリがあるのではないかと考えている。とはいうものの、たとえ数人でも完全に韓国語を使うことのできる人が出たことは教育の力の大きさを物語る。私は教材に、段階別の単語表をつくり、また、段階別に文章の例文をつくっている。私は自分で独自の教材をつくっているが、良い教材が必要である。

横田雅（上智大学外国人教師）

問題は、韓国語を日本人に、いかに早く科学的に習得させ、満足させるかということだ。それには現実の問題として、いろいろの難題が現出される。そうした問題を話し合って解決し合うために、韓国語研究会を中心に毎月あるいは隔月に会合を開くのがよいと思うから、私は それを実現する。

日本での韓国語教育セミナー

＜写真 1＞

1979 年 10 月 9 日、「ハングルの日」を記念して、柳尚熙教授を中心に韓国語教育に携わる有志が集い、「韓国国語教育研究会日本支会」を発足させた。1982 年 1 月 30 日、第 1 回韓国国語教育研究会日本支会の主催で、韓国から韓国国語教育研究会会長の李応百ソウル大学教授を迎え、「日本における韓国語教育セミナー」を韓国文化院で開いた。日本においての韓国語教育の先端に立つ参加者約 30 名により、教材や教授方法、学習方法など、当時抱えている現実的な問題を真摯に討論した。韓国語教育の統一性を模索し、より正確に早く習得できる学習の相互研究情報を交換することで意見の一致をみた。

2.　1980 年代

発展期と言える 1980 年代は、1982 年に「歴史教科書問題」が起こり、84 年 4 月に NHK ハングル講座が始まり、88 年にはソウルオリンピックが開催された。80 年代に入ってからの日韓両国に対する関心が高まることによって、両国を往来する観光客も大幅に増え、企業の進出や留学生の就学が活発になり、大学における韓国語科目も増え続ける状況に置かれた。

88 年 4 月、二松学舎大学に韓国語の講座が開設され、私が赴任した。89 年から韓国語コースを新設することによって、韓国と日本の大学から 5 人の担当講師を招

いて、韓国語をはじめとする文化や歴史、文学、社会、経済、韓国事情などの講座を設け、受講生も年々増え続ける状態であった。韓国語講座の増加による講師不足と共に教材不足の現実で、教材内容も多彩な文学作品や伝統文化、童話、伝来昔話、新聞記事、経済、ビデオなど工夫を凝らしながら、テキストはほとんど韓国から取り寄せるか自らの手作り、または、自費出版することが多かった。

学生中心の課外活動も活発になり、身近な韓国料理屋で食事をしながら食文化の体験をし、メニューと食器の名前や使い方を覚え、私の自宅で料理実習を行ったりして、韓国の生活文化や礼儀作法などの日本との違いを理解したりした。韓国語のスピーチコンテストや学園祭のクラブ活動での料理披露や簡単な演劇、他大学の韓国語を学ぶ学生達との交流会などを通して韓国について勉強した。

校外活動としては、日本の中の韓国を探してフィールドワークに出かけたり、高麗村を訪ねてみたりした。韓国旅行の希望者を集めて現地に行き、学んだ言葉を使いながら自ら肌で感じ、韓国の文化を体験し、初めて延世大学の韓国語学会に参加するなど、日本人学生としてはいろいろと興味深い文化活動を行った。

初めての韓國研修旅行で(延世大學韓國語學會に参加)

3. 1990 年代

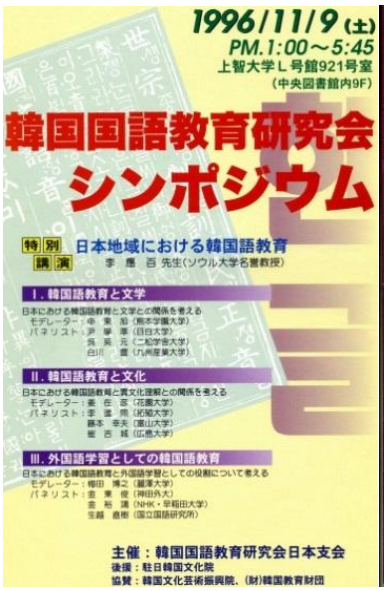
発展期を経て 1990 年代の成長期に入ると、日本全国の各大学に学科の新設や講座の多様化が進められるようになり、二松学舎大学でも 1996 年の 4 月から「日韓比較文学・文化ゼミ」が設けられ私が担当することになった。語学・文学・文化・歴史などの受講生も年々増え続け、語学は一クラス 30 名から 50 名に、文化は 150 名から 200 名と増えていき、私のゼミも 25 名の定員を超え、面接で選抜する状況にあった。ゼミ制度は一度決まれば変更できない必修科目で、3 年次 4 単位、4 年次 4 単位に卒業論文 6 単位と合計 14 単位を修得しなければ卒業できない大変重要な履修科目として真剣に取り扱う研究課程である。

ゼミの指導は、ゼミ生全員でグループを作り、研究発表する形で進めていく。3

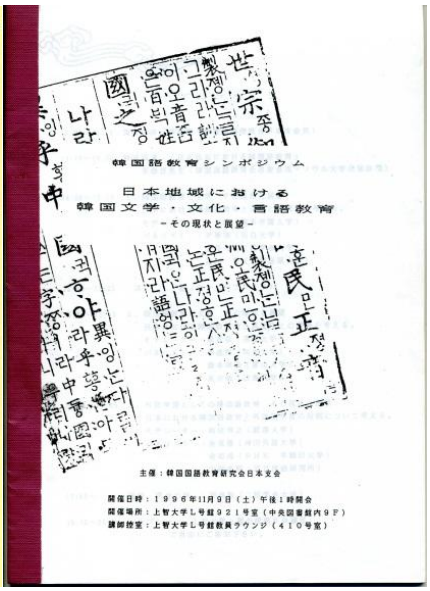
年次の前期は、日本と韓国の文化を中心に比較研究し、歴史や日韓関係の基礎的知識を得たのち、夏休みを利用して韓国研修旅行をしながら実践学習を行う。後期には、日本と韓国の文学を中心に古代から現代までを調べて比較研究し発表する。1年間の日本と韓国の文化と文学を一通りマスターした上で、卒業論文のテーマを決め、4年次の前期に論文テーマを中心とした研究発表と討論を繰り返しながら授業を進めて行き、夏休みのゼミ合宿で中間発表を実施し、後期に完成させて提出する。「日韓比較文学・文化ゼミ」の論文テーマは多様でその範囲は広く、様々な内容にまで及ぶ研究になり、韓国を理解することによって日本を知る大変興味深い楽しみのあるゼミであった。

＜1996年度の韓国語教育研究会＞

韓国語教育の発展過程に伴って最も必要とする韓国研究会の活動も活発になって行った。「韓国国語教育研究会日本支会」は、「韓国語教育研究会」と改称し、研究者や受講者のニーズに応えて研究討論会や教材の情報交換など交流の場を設け、毎年「韓国語教育シンポジウム」を開催した。＜写真2＞と＜写真3＞は、1996年度シンポジウムを上智大学で行った時のポスターと研究発表誌の表紙である。



＜写真2＞



＜写真3＞

当時の状況を詳しく調べて見ると＜写真 2＞のように特別講演として韓国のソウル大学名誉教授である李應百先生を招聘し、「日本地域における韓国語教育」という主題講演を行っていただき、研究発表は、Ⅰ．韓国語教育と文学、Ⅱ．韓国語教育と文化、Ⅲ．外国語学習としての韓国語教育の三分野に分けて、その現状と展望を日本全国からの専門家講師を招いて、参加者約 300 名の集いの中活発な討論会を開いた。

Ⅰ部は、申東旭(熊本学園大学)、尹學準(目白大学)、呉英元(二松学舎大学)、白川豊(九州産業大学)先生方の発表になり、Ⅱ部は、姜在彦(花園大学)、李進熙(拓殖大学)、藤本幸夫(富山大学)、崔吉城(広島大学)先生方で、Ⅲ部は、梅田博之(麗澤大学)、金東俊(神田外大)、金裕鴻(NHK・早稲田大学)、生越直樹(国立国語研究所)先生方の発表となって、国内外著名な学者の集いの場であることを見せてくれた。

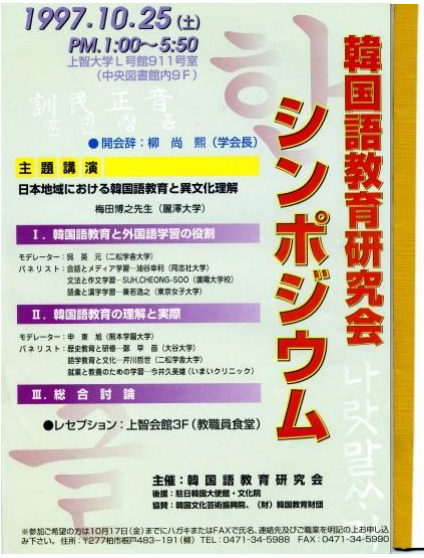
李應百教授の主題講演では、日本における韓国語教育の核心問題といえる日韓両国語の同一性と異質性を中心に具体的な例を挙げながらより良い教育方針を解いてくださり、各分野の研究発表では、教育の現実的な問題や教材についての課題とともに教授方法や文法など具体的な問題の悩みが浮き彫りにされた。

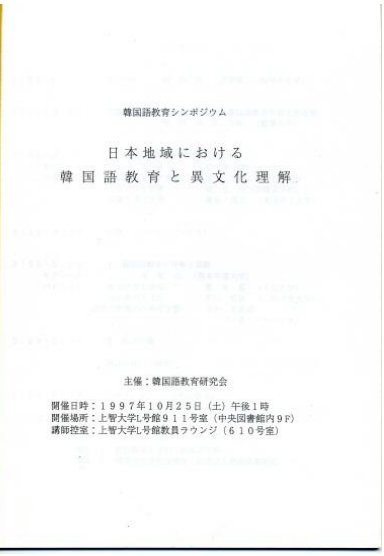
(1996 年韓国語教育学会で、左 2 番目が李應百教授、柳教授と梅田教授、4 と 5 番番目)

＜1997 年度の韓国語教育研究会＞

＜写真 4＞と＜写真 5＞は、1997 年度のポスターと研究発表誌の表紙である。主題講演は、麗澤大学の梅田博之教授をお迎えし、「日本地域における韓国語教育と異文化理解」について講演を行い、シンポジウムのⅠ部は、韓国語教育と外国語学習の役割については、呉英元(二松学舎大学)、油谷幸利(同志社大学)、徐正洙(漢陽

大学校)、兼若逸之(東京女子大学)先生方の発表があり、続いてⅡ部は、韓国語教育の理解と実際について、申東旭(熊本学園大学)、鄭早苗(大谷大学),芹川哲世(二松学舎大学)、今井久美雄(いまいクリニック)先生方が発表した。Ⅲ部には、総合討論を行った。





＜写真 4＞　　＜写真 5＞

梅田博之教授の主題講演では、言語は人間の文化の根底をなすもので、言語と文化は密接な関係にあるとし、言語学習の際には文化学習が同時に行われることという課題を持って、日本における韓国語教育が隣国の異文化理解を目指した外国語学習としての役割や韓国語教育の理解や実際を深刻に考える時代であったことを察することができる。1998 年 6 月、金大中大統領訪日のときに発表された韓国における日本文化の開放政策によって、韓国の映画、演劇、音楽、展示会などの輝かしい活動とともに日韓文化交流が盛んになった。

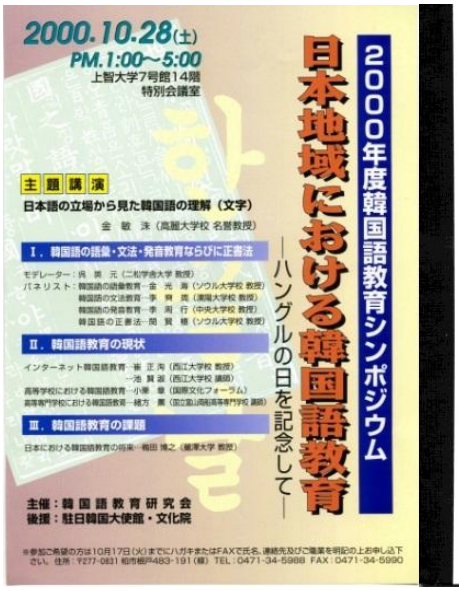
4.　2000 年代

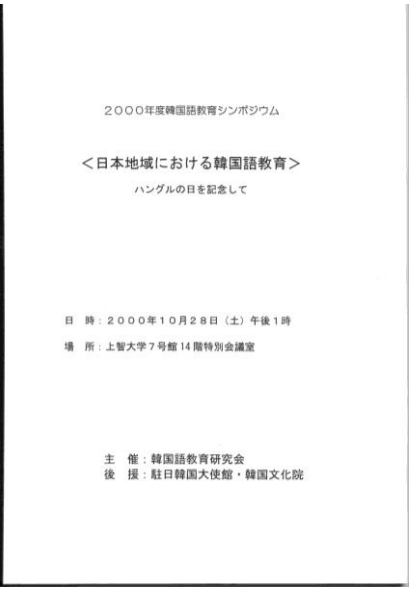
90 年代の韓国ブームに引き続き盛況期と言える 2000 年代には、2002 年のサッカーワールドカップ韓日共催大会もあって、韓国に対する関心がさらに増えて行った。2000 年 6 月現在、駐日韓国大使館教育官室の実態調査によれば、日本における全国 622 大学のうち 161 校が韓国語と韓国関連講座を実施していると発表したが、2005

年の国際文化フォーラムによると、4年制大学で韓国語実施校の割合が47.7%に増加していると発表されている。2002年度から大学入試センター試験に外国語科目として韓国語が導入されることになり、ソウル大学と東京大学がそれぞれ日本学・韓国学課程を開設することを決めた政策の一環で、日韓文化交流とともに学界における新しい学問の発展をもたらすことができた。また、2002年のドラマ「冬のソナタ」を始め、2003年の「チャングムの誓い」（原題「大長今」）で韓国のドラマや映画の人気が日本、中国、台湾を中心に「韓流」ブームの熱風を巻き起こすことによって、韓国の映画や音楽などが日本に大量に紹介され、日本の大学における韓国の文化、言語、政治、経済など韓国関連講座への人気が年々高まっていくにつれて、韓国からの研究者や専門家の来日が多くなり、教材の出版物も豊富になって行き、私の著書も出版社からの依頼によって80年代から2000年代まで10冊ほど出版されたのはこういう時代の背景によるものであった。

＜2000年度の韓国語教育研究会＞

＜写真6＞と＜写真7＞は、2000年度シンポジウムのポスターと研究発表誌の表紙である。日本地域における韓国語教育の主題講演は、高麗大学名誉教授金敏洙先生を招聘し、「日本語の立場から見た韓国語の理解(文字)」について講演を行った。





＜写真6＞　　＜写真7＞

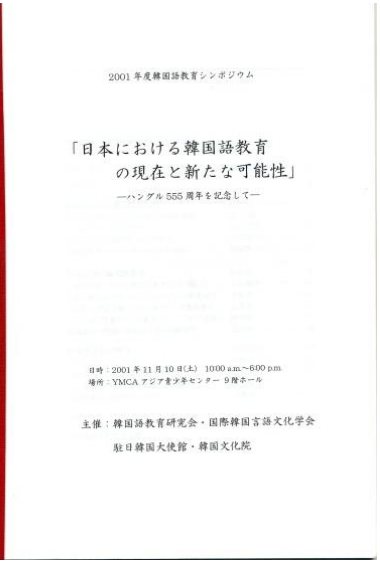
研究発表は、Ⅰ．韓国語の語彙・文法・発音教育ならびに正書法については、呉英元(二松学舎大学教授)、金光海(ソウル大学校教授)、李奭周(漢陽大学校教授)、李周行(中央大学校教授)、閔賢植(ソウル大学教授)の先生方が発表し、Ⅱ．韓国語教育の現状については、崔正洵(西江大学校教授)、池賢淑(西江大学校講師)、小栗章(国際文化フォーラム)、緒方薫(国立富山商船高等専門学校講師)の先生方が発表した。Ⅲ．韓国語教育の課題として、麗澤大学教授梅田博之先生の「日本における韓国語教育の将来」について特別講演があった。次の写真は 2000 年度のシンポジウムに韓国から招かれた講師を中心に撮ったものである。

（左 6 番目から柳教授、金敏洙教授、梅田教授）

＜2001 年度の韓国語教育研究会＞

＜写真 8＞と＜写真 9＞は、2000 年度に続けて 2001 年度のシンポジウムを在日本韓国 YMCA で行った時のポスターと研究発表誌の表紙である。ハングル 555 周年を記念して「日本における韓国語教育の現在と新たな可能性」の主題の本で、三つのセッションに分けて発表した。

第１セッションは、韓国語教育の新たな可能性について、小栗章(交際文化フォーラム韓国語教育事業担当)、山下誠(神奈川県立岸根高等学校教諭)、渡辺了好(二松学舎大学教授)、西澤俊幸(長野県立松本蟻ヶ崎高等学校教諭)、劉錫勲(高麗大学教授)の先生方が発表しており、第２セッションでは、学習者別の韓国語教育について、呉英元(二松学舎大学教授)、北村唯司(ソウル女子大学教授)、李吉遠(東亜大学教授)、金重燮(慶熙大学教授)、趙恒録(延世大学教授)、金貞淑(高麗大学教授)の先生が発表し、第３セッションは、韓国語教育の現在について、芹川哲世(二松学舎大学教授)、申鉉淑(祥明大学教授)、金永満(韓国外国語大学教授)、金永旭(ソウル市立大学教授)、成耆徹(ソウル市立大学教授)の先生方が発表した。

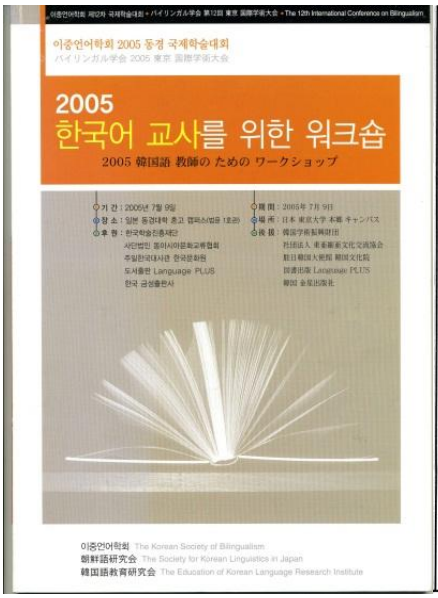


＜写真 8＞　　＜写真 9＞

2001 年度のシンポジウムには、日本の高等学校における韓国語教育が増えることによって、現場に立つ教師の立場からの深刻な課題が多く提起された。英語に続く第２外国語としての中国語や韓国語の位置づけや「韓国朝鮮語」という名称の問題など、外国語科目として英語の教師が韓国朝鮮語を担当しなければならない現実的な問題まで議論される有意義な集いであった。特に韓国朝鮮語は、日本語を母語とする生徒にたいへん刺激的で魅力的な言語であり、日本人としてのアイデンティティーを再構築する不思議な力を持つという高校における先生方の発表に参加者一同は感動し、今後韓国語教育関係者と大学との緊密な連携が望まれた。

＜2005 年度の韓国語教育研究会＞

＜写真 10＞と＜写真 11＞は、2005 年度の韓国語教育研究会が韓国の二重言語学会と朝鮮語研究会の共催により,東京大学本郷キャンパスで開催された時の学会誌表紙と中表紙の目次である。「日本における韓国語教育と二重言語教育」という主題で,韓国語教師のためのワークショップが東京国際学術大会として開かれた。柳尚熙教授(日本韓国語教育研究会会長)の開会辞と李爽周教授(二重言語学会会長)の祝辞の後、崔正洵教授(培材大学校)の司会によりワークショップが進行された。



＜写真 10＞　　＜写真 11＞

午前中は、韓国語の発音と朗読について金上俊(東亜放送大学)教授とテレビ放送を通じての韓国語教育について兼若逸之(東京女子大学)教授が発表し、日韓文学の言語関連研究について呉英元(二松学舎大学)教授と現代韓国語の敬語法について李周行(中央大学校)教授が発表した。午後は、現代韓国語の略語について李爽周(漢城大学校)教授と表現教育論について金貞淑(高麗大学校)教授に続いて、理解教育論を李海瑛(梨花女子大学校)教授が発表した。終わりに総合討論を宋享根(釜山外国語大学校)教授の司会で終了し、参加者 300 名を超える韓国語教育学会は盛大に閉会された。

2005 年の大会を持って、1979 年韓国語教育学会を発足し、27 年間活動して来た夫、柳尚熙会長は、病に侵され、2007 年 8 月 17 日に天に召された。長い間、学会のために二人三脚で苦労を共にしてきた私は、会長の座を適任者にお願いしようと務めたが願いが叶わずに去ってしまった故人の意を継いで、日本と韓国の同志を訪ねていろいろと相談をしてみた。学会を組織し、毎年研究発表会や国際学術大会を持ち続けるということは並々ならぬ大仕事であった。夫は会長として講師や会場の交渉、後援や協賛などの渉外活動に励み、理事の私は、インターネットやメールが普及していない当時、資料の整理や印刷、手紙や郵便物の送付までの総務の仕事をしながら、本職の合間を縫って苦労したことを知っていた立場で、他人に学会の責

任をお願いすることは控えざるを得なかった。

ところが、2009 年 4 月、思いもよらぬ姜奉植教授からの連絡を受けて、日本韓国語教育学会の新たなる創立のための集いを駐日韓国文化院で持ち、「韓国語教育研究会」を引き継ぐ形で発展させることが出来たことは何物にも比べようのない喜びであった。2009 年 9 月、故柳尚熙先生を想い、私の自宅マンションのスカイラウンジで学会創立式を行い、岩手県立大学姜奉植教授を会長に立てて「日本韓国語教育学会」は発足した。

2010 年 11 月 13 日から 14 日まで二日間、「日本韓国語教育学会」創立記念国際学術大会を岩手県立大学で盛大に行うことが出来、引き続き 2011 年 11 月 12 日、第 2 回学術大会を東京の目白大学で行った。2012 年 11 月、第 3 回「日本韓国語教育学会」学術大会が仙台の東北文化学園大学で開催されることを研究者や教育者の皆様に感謝しながら学会の発展を祈るのである。

5.　まとめ

言語とは、人間の思想・感情を人に伝える意志表現の手段であるが、民族によって異なる言葉や文化を理解し合うということは、言葉以前にそれに対する深い愛情と関心がなければその行為は容易ではない。韓国語や韓国関連科目に愛着を持つ人々に対し、韓国語教育者の熱意ある姿勢とより効果的な教育方針で臨む愛情と関心の重さは貴重なものである。

世界は近くなり、韓国ブームは、ドラマ、映画、音楽を超えて K-POP の熱狂的な人気で世界を席巻し、熱狂させ、世界の文化を一つにしている。こういう時代にあってこそ、日本における韓国語教育と「韓国語教育研究会」の歴史を振り返ってみて、これからの日本における韓国語教育や研究会の輝かしい発展とより高いビジョンが世界に向かって大きく羽ばたくことを切に願いながら結びにする。

（二松学舎大学　名誉教授）

韓国語教育研究（第 2 号）

2012 年 9 月 15 日　発行

発行者　姜　奉植

発行所　日本韓国語教育学会

〒161−853 東京都新宿区中落合 4−31−1

目白大学外国語学部韓国語学科

編集者　『韓国語教育研究』編集委員会

文慶喆 ・柳朱燕・宋貞熹・金鉉哲・金殷模

印刷所　㈱ENTERPIA PRODUCTION